

平成 30 年度 第 1 回兵庫県公立大学法人評価委員会 議事録

1 日時及び場所

- (1) 日時 平成 30 年 7 月 13 日 (金) 14:00～16:00
- (2) 場所 兵庫県公館第 2 会議室

2 出席委員

藤田委員、西門委員、西川委員、牧村委員

3 出席職員

(公立大学法人兵庫県立大学)

五百旗頭理事長、太田学長兼副理事長、伊藤副理事長、浅田理事兼副学長、高坂理事兼副学長、内布理事兼副学長、戸田理事兼事務局長、藤原事務局副局長兼教育企画部長、釜江事務局副局長兼経営企画部長、松岡大学教育改革室長、行司社会貢献部長

(兵庫県)

山口企画県民部長、小橋管理局長、法田大学課長、中津大学課副課長

4 内 容

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 議事
 - ・平成 29 年度の取組に関する評価
 - 法人より資料 1、2 について説明後、意見交換
- (5) 閉会

5 意見交換の概要 (●：委員、○：法人又は事務局)

[平成 29 年度の取組に関する評価]

- グローバル化の進展や I o T の爆発的な展開が進む中、日本あるいは兵庫県の立ち位置は高度産業国家あるいは地域のポテンシャルを生かした経済競争力や雇用を維持することである。ライバルは圧倒的にすごい勢いで出てきている新興国である。そのような中で未来の投資として、国・地域の将来を担える新しいリーダーの育成が必須である。今年が県政 150 周年であるが、次の 150 周年に向けてそういう人材を考えるとときである。県立大学においても、次世代を担うリーダーの育成について大いに推進していただき、起爆剤ともいべき強い風を更に吹かすべき総合的な政策をお願いしたい。

これからのリーダーには 2 つの資質が必要である。1 つ目は、高齢化社会、エネルギー・環境問題など「大きな問題」を考えられる人材である。2 つ目は、第 4 次産業革命が急激に進み、社会全体にパラダイムシフトが起きている中「大きな変革、イノベーション」を牽引できる人材である。

今後は答えが見えない問題に対してどう対応していくかが重要であり、広い

意味での専門性を極めていく人材と、総合力を高めていく人材の2つのタイプが必要とされる。前者は、インダストリー4.0をはじめとした新しい時代の流れを感じたら、誰よりも早く新しいビジネスモデルを提示し、チーム作りを推進していくようなタイプである。後者は、原発、環境、エネルギーなど様々なことを大きく捉えて将来のビジョン、ロードマップ、施策等を考えるタイプである。

人によって専門性を追求していくことが向いている人、総合力を高めていくことが向いている人と、向き不向きが個人の適性としてあるので、大学としては専門性を追求するコース、総合性を追求するコースという多様性が必要である。

専門性、総合力というどちらの「枝」から入ってもいずれは「幹」につながるので、入口となる「枝」をしっかりと学生たちに提示するとともに、ふるさとの様々な優れた人達の話聞き、インスパイアする機会を与えていただきたい。

→ ○ 日本全体の研究力が落ちてきているのではないかとされている。大学設置基準の大綱化で、教養教育と専門教育の区別をなくしていくこととなったが、もし、お互いが有機的につながって効果を発揮していたら違っていたのかもしれない。グローバル化や情報化が進んで、コミュニケーション能力などスキルは共通教育によって得られるが、教養の部分がおざなりになってきている面があるのではないかと思う。大学は教養をしっかり教えなければならない。教える側の教員が学生に背中を見せられるような教育をしなければならない。全人教育ができるような大学になってほしいと思うが、それぞれ大学によって集まっている学生は違うので、本学がどういった立場で実現していくかが重要であると思っている。専門性についていえば、例えば、工学部では基礎を広く教えている。先端技術は今日新しくても明日には古くなるという状況にあるので、基礎をしっかりと教えなければならない。工学部が8つの小学科を3つの大学科に統合したのは、学部では基礎を幅広く教え、専門性については大学院で教えるという考え方からである。

→ ○ グローバルビジネスコースは、リーダー層の育成を考えて作った。これまでも半分くらい英語の授業を受けたら単位をだすコースは持っていた。しかし、それはあくまで日本語が前提で、日本人学生のグローバル化のためのものであった。しかしこれからは、縮小している日本の学生だけを相手にするのではなく、世界で爆発的に成長しているアジアやアフリカを相手にして勝てる大学となるようにしなければならない。その上で、これからの兵庫県あ

るいは日本を担っていく人材を育成していく。そのため、他学部や他のコースに比べたら非常に手厚い教育内容となっている。これまでは数人しかいなかった外国人教員を2桁に増やし、コースの3分の1は外国人教員にするつもりで人事をやっている。また、グローバル＝ダイバーシティであることを学生に理解してもらうために、1年間の国際学生寮での共同生活を考えた。擬似的なダイバーシティ空間を作り、そこで1年間共同生活をすればきっと学生は変わると思う。

これからは、世界大学ランキングを意識して、世界を相手にできる大学を目指していく。

- 2つ目は産学連携である。今の世の中、大概のものはどの中堅・中小企業でも作ることができ、すぐにコモディティとなっていくため、価格勝負の世界になる。価格勝負となると、新興国が相手であるため、いずれ大変なことになっていく。そのような認識のもと、これから伸ばすべき成長分野としては、健康医療、環境・エネルギー、航空機、ロボット・AI・IoTの4つの分野があげられる。これらを大きく捉えて大きく変革する必要がある。

金属新素材研究センターは非常に良い試みであるが、企業の立場からすればシーズオリエンテッドでは上手くいかない。試験片レベルの細かな考察では十分でない。例えば、時計の針を10年前に戻して、ジェットエンジンの話をすると、良い材料があるから粛々とやればタービンになるだろうというやり方では10年後の今でもタービン翼はできていなかった。タービンを設計する側から材料をみないといけない。最初から社内でも力のある設計者と組んで、出口をしっかりとみて材料開発をしなければならない。ビッグデータも同様である。社会課題といってもどんな社会課題を解決するのか、ビッグデータを使う側と組んでやっていかなければならない。我々は大学に対して今日、明日の期待ではなくて、明後日、明明後日の期待をしている。シーズオリエンテッドというやり方では上手くいかない。バックキャストの思考で開発をしなければ失敗に終わるのが常である。最初から有力な企業と組んで、将来ビジョンを持ちながらやっていくことが必要である。もちろん科研費の獲得も大事であるが、原点をしっかりとらえてやってほしい。我々は人材育成に必ずしも即戦力を求めている。大きな問題を大きなイノベーションとして捉える人材を望んでいる。産学連携も何か良い材料があったからやっていくという進め方ではなくて、将来の大きな社会課題からバックキャストしてやっていく方向を考えていただきたい。

→ ○ ビッグデータを使ってどのような社会課題に挑むのかが鮮明でなければならぬとの指摘は非常に重要である。情報科学をしっかり学ぶとと

もに、公共政策といったような社会の中の課題をつかむことを組み合わせることが大事で、社会科学全般の中から何が問題であるのかを認識する力とビッグデータを使いこなすスキルの両方が大切であると考えていた。しかし、文部科学省から情報科学を充実させるほうがいいとのご指導をいただいたため、情報科学がメインとなっている。ただし、学生が情報科学を学ぶ一方で、社会の課題を鮮明に意識できるような補完措置をとっていかねばならないと感じている。

→ ○ 金属新素材研究センターは兵庫県の産業界に役立つことを考えている。大学シーズから発展していくことも必要であるが、企業を取り込んでやっていくことが重要なので、企業と組む話を進めている。兵庫県の南は金属産業が発展しており、その地域を支える地元の企業と共同してやっていけるような道をつくりたい。

健康の分野では、先端医工学研究センターを大きくして、医産学連携を推進していく。AI、ロボット分野については、産学連携・研究推進機構のなかに、AIを核とした研究センターが作ることができるのではないかと検討している。

● 留学生の受入れについては、質と量と両方の問題がある。学生が減少していく中で、定員を満たすために留学生を確保している大学もあるが、単に人数を増やせばいいというわけではない。優秀な学生はアメリカやイギリス等に留学する傾向があるが、日本に留学に来てよかったという学生も少なからずいる。各国の都心部だけでなく地方にも優秀な人材がいるので、質の高い留学生の受入に努められたい。

そもそも県立大学が留学生を増やそうとしている目的は何か、受入人数が目標に達しない中でどのように対策をされようとしているのか。また、留学生の帰国後のフォロー体制や受入先の国とのネットワークは構築されているのか、県の海外事務所のような拠点はあるのか。

→ ○ 量だけ確保しても仕方がない。質が重要であると思っている。特に、グローバルビジネスコースは、グローバルスタンダードで教育をやっていく。すなわち、英語でしか卒業できない体制で留学生を受入れる。留学生30人の確保については、タイの教育省と連携してタイの優秀な高校生を推薦してもらうことや五百旗頭理事長の人脈を活用し、外務省を通して色々な国との話も進みつつある。また、大学としても、シアトル、パース、パリ、香港など県の海外事務所を拠点に活動しているほか、東南アジア中心になるが、台湾やマレーシア、ベトナムにも働きかけをしている。

また副理事長をはじめ大学の幹部が、県下の大企業、中堅企業をまわって、留学生の採用、支援、奨学金等についてご支援をいただけるよう、新学部のアピールをしている。

留学生が卒業した後のフォローは非常に重要だが、今までは同窓会任せで居場所や活動状況について、長くは追えない状況になっていた。しかし、これからは同窓会が、海外の活動拠点を活用しながら把握するだけでなく、大学自身が卒業生の情報をグリップする努力をするようにしていきたい。

→ ○ これまで、留学生の受入人数を確保できなかったのは、日本語ができる学生しか受入をしてこなかったからである。また、スカラシップが弱く、ドミトリーもない、カリキュラムが留学生にとってフレンドリーでない、インターンシップや出口のサポートも十分でないということもあった。これからは、より多くの留学生を受入れるため、様々なサポートをしていきたい。

● GLEP生のTOEICの平均点が541点から565点に向上したのは具体的にどのような活動をしたのか。

大学統合前の卒業生に会うと現在の県立大学が何をしているのか分からないという話を聞く。卒業生に対して現在の県立大学のことについて具体的に説明をしているのか。大学が具体的にどのようなことをしているのかが分からないため、自分の孫に県立大学への入学を勧めることができないという話を聞く。県立大学に入学した場合、どんな力を身につけることができるのかを受験生に具体的に伝えてほしい。

→ ○ GLEP生のTOEICの平均点が上がった要因は、大きくまとめると2つあると考えている。これまで英語の授業は1クラス50人でやっていたが、25人の少人数にしたこと。また、ネイティブに教えてもらうことが学生たちの英語を学ぶインセンティブにつながると考え、2人しかいなかったネイティブの専任教員を増やし、ネイティブによる授業も増やしたことの2点である。

→ ○ 3つの大学が統合して今年で15年目となり、兵庫県立大学のことは知っているが神戸商大や姫路工大を知らないものも多く、そういう時代になってきている。今の若者に昔のことをアピールすることはできないので、兵庫県立大学のブランド力をどのように上げていくかが重要である。

● 国際商経学部のグローバルビジネスコースにおいて留学生30名を増やすことは大学全体にインパクトを与える良い試みであるので、実現していただきたい

い。新学部を設置することは新しいことができるチャンスでもあるので、大きな視点を取り入れて教育をすることも考えてほしい。

留学生の出身国は東南アジアが中心になると思うが、欧米、中近東、アフリカも含め、できるだけ世界中の国からバランスよく留学生を確保されたい。

→ ○ 新学部の開設は、兵庫県立大学が上昇するチャンスであるので、この機を逃さないようにしっかり取り組んでいきたい。そのためには、グローバルビジネスコースがすごいなと世間に認知されるように、また、社会情報科学部がレベルの高い教育と研究をしていると社会から評価されるようにしていかなければならないと思っている。

留学生については、国際交流コーディネーターをそれぞれの国で任命して、高校生を探していただいているほか、東南アジア以外の国からも留学生に来てもらえるように働きかけを行っており、ルーマニアからの留学生の受け入れの話も進んでいる。

● 北京、香港、シンガポールなどの海外大学は、ビジネスとして大学をどうしていくかを考えている。留学生に対して県立大学がもっているものが十分にアピールされていないので、大学をどのように魅力的に作っていくのか、色々な角度から人を惹きつけて来てもらえるような大学になるような取組をされたい。

→ ○ 広報力が圧倒的に不足していると感じている。今秋には広報戦略を作る。誰をターゲットにどのような広報をするかを広報戦略にうたい、戦術を展開していくことを考えている。

● 国際的な教育、最先端の研究を推進するには教員の確保が必要であり、教員にインセンティブを与えることができるよう県も支援してほしい。大学が一体となって世界の兵庫県立大学になっていくことを期待している。